

研究区分	教員特別研究推進（教育推進）
------	----------------

研 究 テーマ	チーム医療を実践する臨地実習に関する教育プログラムの評価				
研究組織	代 表 者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	山田 紋子
	研究協力者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	林 みよ子
		所属・職名	看護学部・講師	氏名	前野 真由美
		所属・職名	看護学部・講師	氏名	鈴木 郁美
		所属・職名	看護学部・助教	氏名	中岡 正昭
		所属・職名	看護学部・助教	氏名	長谷部 美紀
		所属・職名	看護学部・助教	氏名	植田 春美
		所属・職名	看護学部・助教	氏名	中村 卓樹
	発 表 者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	山田 紋子

講演題目
チーム医療を実践する臨地実習に関する教育プログラムの評価
研究の目的、成果及び今後の展望
【 研究の背景・目的 】 令和 4 年度カリキュラム改正(以下、カリ改正)に伴い、4 年次配当科目「臨床シミュレーション EBN 実習」(2 単位)を成人看護学分野から保健師看護師助産師学校養成所指定規則における統合分野「看護の統合と実践」(以下、統合実習)に分野移行し、教授内容・方法の検討を行い、令和 7 年度に新たに開講した。以上のことから、本研究の目的は、当該実習が統合実習としての教育効果が得られるのかどうか検証および評価を行うこととした。 【 研究方法 】 第 1 に、履修時期がカリ改正以前の令和 6 年度生(以下、6 年度生)と改正後の令和 7 年度生(以下、7 年度生)の評点を分析した。分析では記述統計量を算出し、各評価項目(全 20 項目)の得点を両年度間で Mann-Whitney の U 検定を用いて有意水準 5%(両側)で比較した。第 2 に、7 年度生 5 名にヒアリング調査を実施した。第 3 に、第 1、2 の結果を踏まえ、研究者間で実習内容・方法について検討した。なお、事前に対象者に研究目的、方法、倫理的配慮について文書と口頭で説明し、文書による同意が得られた者のデータのみを分析の対象とした。 【 結果・考察 】 量的分析の対象は 6 年度生 117 名、7 年度生 123 名の評点であった。年度間の比較では、評価項目 20 項目の内、有意差が認められた 5 項目は 7 年度生の方が得点の高い傾向にあった。特に、「チーム内での適時的な情報交換・共有」「有意義な議論」「医療者・教員への適時的な報告・連絡・相談」というチーム医療に関する 3 項目が高い傾向にあった。ヒアリング調査では、3 年次後期に新規開講した「多職種連携実習」の学びを活かして「自分たちのチーム連携を考えることができた」、「医療者全体が 1 つのチームであることがわかり、医療者や教員に自ら報告や相談ができた」などの意見が聴かれた。これらの結果から、「多職種連携実習」での学びを基礎とすることにより、当該実習での看護職間のチーム連携が多職種間においても「連携」という点では同質であり、具体的なチーム連携の方法の習得へとつながっていることが示唆された。また、当該実習単体でなく、チーム医療を軸とした学部全体のカリキュラムの再構築による教育効果が推察された。しかし、単年度の実施だけでその効果を判定することは早計であると考え、次年度も継続して形成的評価・検討をしていくこととした。